

Mongrol-un niyuca tobciyan

—Yekemingyat'ai Irinčin sergügelte

原 山 煌

中國における近時の『元朝秘史』（以下『秘史』と略稱）研究の爆發的增加には驚くべきものがある。長い間、文化大革命の學界への影響で塞ぎ止められていた研究論者が、堰を切ったように發表されはじめた、というのが事態のありようであろう。筆者は一九七八年に『元朝秘史關係文獻目錄』（日本モンゴル學會發行）を公表したが、手もとに把握できた限りの、その後一〇年間に發表された業績を見ても、中國、特に内蒙古での研究は完全に他を壓する状況である。中國においては、研究論著の公表だけではなく、學術交流の面での活動も行われ、例えば一九八八年夏には内蒙古師範大學において、『秘史』専門の國際學會まで開催されるという盛況を呈している（なお、一九八九年一月一八日開催の日本モンゴル學會（京都府立大學）におけるナツアクトルジ氏（モンゴル人民共和國科學アカデミー歴史研究所所長）の言及によれば、ウラーンバートルでも、一九九〇年に『秘史』をめぐる國際學會が開かれる豫定とのことであった）。こうした中國における活潑な研究の潮流の中で世に問われた成果のうち、『秘史』研究者が座右において活用すべき研究もいくつか含まれているのは幸いなことである。たとえば、バヤ

ル『蒙古秘史（*Mongrol-un niyuca tobciyan*）』（全三卷、内蒙古人民出版社、一九八〇年）、エルトダイ・オユンダライ・アストラト『《蒙古秘史》詞彙選釋』（内蒙古人民出版社、一九八〇年）、エルトダイ・アルダジャブ 還原注釋『蒙古秘史還原注釋（*Mongrol-un niyuca tobciyan—seyregügil tazıburı*）』（内蒙古教育出版社、一九八六年）などは、ぜひとも参照すべきものと言えよう。

ここにとりあげたイリンチン（亦鄰眞）復原『元朝秘史（畏吾體蒙古文）』は、その中でも特筆されるべき成果であろう。この著作は、もともと『内蒙古大學學報』（蒙古文版）に一九八四年第三期から連載されたものだが、*Mongrol teüken sorbolıjs-un çuburıl*（『蒙古史史籍叢書』）とでもいえばよい）として單行されたのである。

著者はよく知られているとおり、内蒙古大學のモンゴル史研究の指導的な位置にあり、『内蒙古大學學報』をはじめとする多くの學術雜誌などに發表された論文や著書は、内蒙古のみならず中國の『蒙古史』研究の最も重要で先進的な部分であり續けている。來日の折にも、モンゴル史元朝史雙方にわたる該博な知見により、私選に大きな影響を与えられたことは記憶に新しいところである。フィロソジカルな學問的基盤を確固として保持する誠實な研究姿勢は、中國の學界にあつては甚だ異彩を放っている。評者は、かねてより『秘史』を研究對象としており、また幸いにも著者より同書一本を惠授されたこともあつて、能力の不足をまかえりみず、些かの感想を述べることにしたものである。専門の偏在から、特に重きをおいて評すべき言語學的コメントがないという、變則的な形になることをあらかじめお断りしておきたい。讀者の御諒恕を願うものであ

る。

さて私たちは、この著書を論ずるに當たつて、時期をほぼ同じくして發表されたもう一つの同様の試みに言及しないわけにはいかない。それは言うまでもなく、私たちに『秘史』言語學の立場からの精密なコメントを提供した、小澤重男氏の『元朝秘史全釋』（上・中・下）、『元朝秘史全釋續攷』（上・中・下）〔風聞書房、一九八四—一九八九年〕である。なぜここでそれを引き合ひに出すのかという、小澤氏の著作には、『秘史』の『ウイグル式蒙古文字還元文』のテキストが附されているからである。ただし、兩者を言語學的に比較検討することは、先述したように言語學徒ならぬ筆者の到底なしうるところではないし、また專家の立場からこれら二者を對象とする詳細な書評がきつと行われるであろうことを期待して、ここでは内容の照合をしない。ただ一つ残念に感じられたのは、後述するように、イリンチン氏の著書が、きわめて細かい問題を提示しているのに對して、小澤氏のウイグル式モンゴル文字表記テキストの部分には、説明らしきものが見られないということである。どのような原則のもとに、この作業がなされたかについては、『もし漢字音譯の基礎になつたモンゴル語原文（中略）が現在まで残つていたらとすれば、このような形で示されるのではあるまいかという思いからでもあり、又、秘史モンゴル語を研究する學生諸君の參考に供しうるとも考えたから』（『全釋』、上、「はしがき」四頁）という抽象的なコメント以上のことを、窺い知る術はない。ぜひいづれかの機會に、この部分の表記原則を御提示頂きたいと思う。また、同時に開始されたこの試みを、お互いに書評し合われることが最も望まれる形であるので、兩碩學の御考慮をお願いする次第である。こ

こでは、兩氏のテキストに、ざつと通見しただけでも、斷句や表記上の相違が散見されることだけを確認しておこう（試みに卷一を比較したところ、小澤氏のテキスト（『全釋』上）に明らかに誤りと思われるものが、僅かながら見られたので、ついでながら指摘しておく。脱漏（一）で表示した部分）は、ウイグル字還元テキストの部の第六節二行目の *tergen* (ᠲᠦᠷᠭᠡᠨ)〔三六九頁〕、八節三行目の *tumad-un* (ᠲᠤᠮᠠᠳᠤᠨ)〔三七〇頁〕、一四節二行目の *kuṭān* (ᠬᠦᠲᠠᠨ)〔三七六頁〕、三二節二行目の *qarḡarain* (ᠬᠠᠷᠭᠠᠷᠠᠢᠨ) *buyu* (ᠪᠤᠢᠭᠤ)〔三九三頁〕。また三二節四行目の *inu* (ᠢᠨᠠ)〔三九五頁〕は重複。

ところで、漢字音譯という、きわめて異例な體裁を持つ『秘史』の原典を『復原』することの困難さは、『秘史』研究の足跡、特に言語學からする多大な成果を些かなりとも知る者であれば、誰しも容易に認めるだろう。原典がどの字で書かれていたのか、原典の表題はどのようなものであったのか、などなど。いやそれ以前の問題として、『原典』の定義とはいかなるものかということ自體が、この場合は大いに討議を要するのである。従来から、特異な形式の『秘史』の内容を、モンゴル文字で表記しようとする試みは、何度かなされてきたところである。ウイグル式モンゴル字が自らの文字であ（り續けてい）るモンゴル（人民共和國では、キリル字式モンゴル文字が使用されていることは周知の事實である）におけるモンゴル文字表記による『秘史』の業績は、それはそれとして全く別の意味を持ちうるであらう。しかし、モンゴル學の作業の一つとしてそれがなされる場合は、實に多くの、よるべき原則、作業のための姿勢などが明らかにされる必要があるだろう。イリンチン氏は、一九四〇年代に現れたこの種の「翻譯改寫」や「倣製原文」の試み〔ドゴルジャ

ブ、ケシグバトゥ、梁翠軒、金永昌などによる」を、學術的には非常に幼稚なものであると批判する。

しかし、このような作業は、極めて難しい問題を含み持っていることも事實である。たとえば古く一九三九年、モンゴル文字表記の『蒙文元朝秘史』（文求堂）をドゴルジャブ氏と共に發表した服部四郎氏は、いみじくも「漢字面に徒らに忠實に蒙古字を以て轉寫したならば、蒙古の人々にはもつとわかりにくく」（「序」一頁）、「それが字面に如何程忠實であらうとも原典の再建とはならない」（同）と言っている。そして同書は、「蒙古の人々に」讀ませるため、さらには「初學者のために」研究を容易ならしめることを目的として作られたということになっている。音譯された漢字の音を忠實に再現するか、當時の發音に従うか、この二つの考慮すべき原則の狭間に立つて、そのどちらでもない結果になったわけであるが、イリンチン氏もやはり、自らの復原作業について、これは「相對的」なものであつて、原書の本貌を再現しようというような高望みはできない、と斷わっている。

イリンチン氏は本書にモンゴル文、中國文合璧の長大なまえがき〔《元朝秘史》及其復原】：*Mongol-un nyuca tobciyan kiged tegün-i sergijelte*〕を書いているので、そこから窺える『秘史』に對する氏の見解をまとめてみよう。それは、ウイグル式モンゴル字還原にあつたての原則を述べるだけでなく、成立年次、原典誕生のいきさつ、史料としての評價、文獻學的意義の追求など、およそ『秘史』に關するあらゆる問題に及ぶ壮大なものである。從來の研究の集積を充分に踏まえ、隨所に大膽とも言うべき見識を展開したものである。周知のように、『秘史』の成り立ちについては、從來

多くのすぐれた研究があつたにもかかわらず、不分明な部分がなお多く殘されていると言わざるをえない。決定的な根據の不在が最大の原因ではあるが、それでは「既成の」史料をもとに、イリンチン氏はどのような『秘史』像を描くのであろうか。

まず、イリンチン氏がタイトルとした「畏吾語」による復原という點。本書でなされる作業への、根本的な問いかけともいふべき、『秘史』が一體どのような種類のモンゴル文字で表記されていたのかという問題については、バクバ文字で原典が書かれていたという説（たとえば服部四郎氏の主張）に反駁を加え、ウイグル式モンゴル文字で表記されていたと斷言する。この點では二つの可能性を含ませつつ、兩體で復原を行った小澤氏と對照的である。

『秘史』の史料としての性格に關しては、多方面の研究價值を持ち、古代モンゴル社會、歴史の百科全書となつているとし、その中に、古代モンゴル社會の生産活動のダイナミックな記録、社會組織の發展と變化を見ることができると評價している。とかく『秘史』評價にはつきもの、年代表記の不正確さに起因する「信頼性」の缺如や「文學性」の過大さの問題については、年代表記の混亂は、早期の歴史編纂においては普通にみられる現象であり、『秘史』の場合には編纂に係つた必關赤（ビチクチ）が一人ではなかつたということもこの混亂の一因とする。文學性が濃厚に漂つていることも、むしろ積極的に評價しようという姿勢であり、「文史不分」は初期の歴史書の特長であり、文學的描寫も「評論」としてとらえるべきだと言う。中華帝國における史官のような、歴史記述のための嚴格な訓練や、すぐれた先例に無縁だった『秘史』の編纂者（達）は、かえつてそれ故にこそ、「破天荒な」歴史記述をなしえ

たのである、と。そして、『秘史』は『金冊』*altan tseher* や、『聖武親征録』、さらにはラシード・ウッディーンの『集史』のチングスハーン紀などの重要な史料源となっているという。

次に、成立時期と、出来上り方について。氏は、現在行われている諸家の説を紹介検討した後、ネズミの歳に、クリルタイが、闊迭兀阿剌勒の地で開催された可能性のある歳次は、一二二八年ただ一回であるとする。従って、最終節二八二節に現れるネズミの歳とは一二二八年だとした上で、『秘史』が一舉に現今の姿をもって出現したものではないという主張をも提示し、それによって、かねてから指摘されている一二二八年成立説が持つ諸矛盾を解決しようとするものである。つまりこの年次に著されたのは、最初の大きな部分、すなわち巻首から二六八節までであるという説である。次に、古來論争の焦點となっていた『秘史』の「著者」についての議論では、現在の史料の状況では、特定の個人をあてようと試みること自体が徒勞であると言い、古老グループの回想と口傳えを（複数の）ビチクチが記録し、「整理加工」したものではないかと考えるのである。いわく、「（彼らの）文化は、一個人が獨目に歴史を記述できるとする水準には、未だ發展していなかった」（八六頁）と。

現行のごとき形式、すなわち漢字音譯本にされたのは、一四世紀末葉のことであり、いわゆる「中原雅音」の原則により音譯されたとする。漢字音譯本の譯寫者の言語學的素養は、一四世紀末という歴史的條件を考慮に入れるならば、並外れて高い水準にあったと賞賛している。たとえば、工夫を凝らした注音記號の役割を果たす漢字小字、それにもまして傍譯という優れたシステムがなければ、『秘史』の中に出て来るいくつかの語は、讀解不能のまま死語とし

て片付けられたらうというのである。イリンチン氏は何度も、『秘史』が現在あるような形になったのは、「通事」「譯學生」養成の爲のモンゴル語の教材にするためであったという可能性を提示する。より正確に言うくと、可能性を示すだけにはとどまっていな。漢字音譯『秘史』が、ウイグル式モンゴル字の文からかけ離れた（と思われる）形を示すことがあるのは、それが「蒙語教材」だったので、學習者の記憶や理解を容易にする便法となされたからだ、というのである。すなわちここでは、教材であるということが『秘史』の漢字音譯の「變形轉寫」の根據となっているのである。『華夷譯語』と同時に印行されたという事實や、到れり盡くせりの漢字による語説明の仕方などから、なんらかの實用的な用途にあてられたという「狀況證據」はあった（拙稿「元朝秘史」（神田信夫・山根幸夫編『中國史籍解題辭典』燎原書店、一九八九年、七九—八〇頁）において、評者は、このような特殊な本が「板本」として生産されたという點に、特に注目すべきだと考えている、と述べた。少なからぬ、繼續的な需要の存在が容易に想像できるわけだが、おそらくそれはイリンチン氏が言うような需要だったろう）わけだが、ここまで踏み込んだ解題は珍しい。

また、復原というからには、どの時點での『秘史』のありようを基準にするのが大きな問題となるはずであるが、残念ながら『秘史』が一舉に編纂されたものではないらしいとは言えても、どの部分がいづ出来上がったのかという確定は到底できない。この點についてのイリンチン氏の見解を見よう。『秘史』の祖形である「草原の史臣」が作った元朝以前期の「脱卜赤顔」*Todokchayan* には、固定的な書名などはなかっただろうし、もしつけられていたと假定する

ならば、もっともありそうなタイトルは「黄金國史」*altan tobčïyan* だったのではないか、という推測は、確證はまったくないものの、はなはだ刺激的である。さて、『秘史』の成立ちを考える際の、さまざまな難問を最も象徴的に示すのは、表題である。表題と言っても、漢字音譯本テキストの第一卷一葉表一行目の「元朝秘史」*Mongol-un niyūša tobčïyan* という「表題」と、「成吉思合罕訥忽札兀兒」*činggis qayan-u quǰar* という同葉二行目に現れる「表題」の二つがある〔但しこれは一二巻本の場合。目睹しえた限りの一五巻本（ソ連本。靜嘉堂文庫所藏の陸心源舊藏本では残念ながら冒頭の一葉が脱落しているので確認不能）では、後者の「表題」は二行目から始まる本文の冒頭に置かれている。なお、後者は表題ではなく、本文の最初の部分であるという説もある〕。今日のようなテキストを持つ『秘史』が出来上がる過程の、どの段階でこの二つの「表題」は登場したのか、確かめる有効な方法は、現段階ではないと言わざるをえない。イリンチン氏は、「元朝秘史」のタイトルは明人によるものであり、それをモンゴル文に「返譯」したものが *Mongol-un niyūša tobčïyan* であると言¹、また、後者の表題についても、チンギス・ハンの家系の神話時代からの神話傳説を混ぜた形での家譜をあらわすものであり、巻頭から六八節（テムジン・チンギス・ハンの父、イエスゲイ・パータールの非業の死を描いた部分。一二巻本の第一卷全部に相當）までの内容を表すものにしかすぎない、とする。

次にざっとイリンチン氏のウイグル式モンゴル文字還原の原則について見よう。表記に当たっては、一五個の「原字符號」が使用される。すなわち、A (a, e を表記。ede 「這」ene の複數形。

「これらの」の意)をイリンチン氏はAADAとし、小澤氏はADAとする。語頭のeは、文語モンゴル語の文字表記の語頭のaと同じ形になるのである)、O (o, u, ö, ü を表記)、I (i, y を表記)、N, B, Q, K, R, L, M, Č (č, j を表記)、S, T, D, W (外來語を表す。「豁埃」に對して、小澤氏はqowaiとローマ字轉寫し、qowaiのごとくウイグル式モンゴル文字に還原するが、イリンチン氏はOOQAIと綴り、「都蛙鎖豁兒」〔卷一、五節〕を、小澤氏はduwa-sogurとW字を使うが、イリンチン氏はDOO-Aと綴る)である。これらの他に、さらに小澤氏は、イリンチン氏がTAISIと寫す「捏坤太子」〔卷一、五〇節〕の「太子」をtainiとする。

さて、イリンチン氏は還原に当たって、「相對的」な表記をする²と記しているが、それはどのような場面で現れるのだらう。漢字表記にどこまでも忠實に「還原」したとすれば、確かに服部氏の言うように甚だ難解となってしまう。たとえば、「人」を表す「古溫」〔卷一、六節に初出〕は小澤氏のローマ字轉寫によればkuinとなり、「子」を表す「可溫」〔卷一、二節に初出〕はkuin (同じく小澤氏)となる。これをウイグル字に「そのまま」還原したとすれば、KOIONという全く同じ形にしかなりえない。卷一、一四節のようにこの二語が続いて現れる場合には、「そのまま」の還原ではいたずらに混亂を引き起こすだけであらうし、何よりも意味不明のものとなってしまう。多かれ少なかれ「相對的」な還原方式を取らざるをえない所以であらう。この兩語を例にとると、「古溫」は兩者ともKOIMONとする。しかし、「可溫」については、イリンチン氏はKOIBAKON³、小澤氏はKAKON⁴と表

記する。小澤氏の方式は漢字表記により近い形で、イリンチン氏の場合は文語モンゴル語表記により近い形とでも言えるかもしれない(もっとも、「子」の意を表すこの語の文語形には、*kuu* と *kobegün* があって、小澤氏は前者を、イリンチン氏は後者を採用したというだけの事だとも言えるかもしれない)。

その他、接尾辭 *suffix* についても、兩者の相違が際立つ場合がある。副動詞語尾の「阿速」(額速) (*asu* ~ *esu*)、巴速(別速) (*basu* ~ *besü*) [converbum conditionale] を表記する際、イリンチン氏は、一様に *-basu* ~ *besü* と寫し、小澤氏は *-basu* 系と *-basu* 系を嚴格に使い分ける。t と d の使い分けの点でも相違する場合が多い。このように、はからずも時を同じくして發表された二つのウイグル式モンゴル文字還原『秘史』は、それぞれの個性を主張して存在している。先述したように、專家の詳細な検討を望むのは、この故である。

最後に、著者および讀者諸賢に、この一文が同書のいわば本筋でないテーマにこだわる、しかも不十分な紹介の域を出ないものになった事をお詫びし、著者の斯學への寄與のますます豊かならんことを祈りつつ、また私たち後學にいいよ大きな學恩を今後も變わらず賜るようお願いしつつ筆を擱く。

一九八七年八月 呼和浩特 內蒙古大學出版社

A五判 二八七頁 二・八五元

Regat Kasaba

The Ottoman Empire and the World Economy; The Nineteenth Century

岡野内 正

一

普通の人權なる概念を生み出し、それを支える生産力を手中に全世界を包攝せんとする近代西洋。これに對する東洋は、無主體的な停滯のもとにあり、ひたすら西洋化、近代化を待ち望まねばならぬ存在でしかないのであらうか。非西歐的なものの中にも普遍的なものを見いだし、西洋世界との連關におけるその歴史的展開の延長上に、人權保障の實現を主體的に展望することはできないのであらうか。

西洋的な文脈での普通的人權というもののイデオロギー性(人權の内容の人種的、民族的、國民的、階級的な限定)を強烈に意識し、同時にイデオロギー批判のもと實踐的意義を自覺して人權保障の普遍的實現の經路を歴史的に展望するかにみえるイマニエール・ウォラーステインらの世界システム論⁽¹⁾が、多かれ少なかれ獨裁的な政治體制下にあるラテン・アメリカやアフリカ諸國のみならずトルコの研究者をも引きつけたのは、その理論構成が、上のような問いに答える方向性を示すものであるからのように思われる。

ウォラーステイン編集の雑誌レビューは、創刊號から若手トルコ人研究者によるオスマン帝國史批判の論文を掲載する。翌年のアナ